二人の独学者レオン・ド・ロニーと村上英俊
― 日本語教育とフランス語教育の源流 ―

伊ヶ崎泰枝

はじめに

レオン・ド・ロニー Léon de Rosny（1837～1914）と村上英俊（1811～1890）は、それぞれ、フランスでの日本語学・日本語教育、日本でのフランス語学・フランス語教育の草分け的存在と見做されている。彼らは、19 世紀半ばにそれぞれ書物を通して日本語、フランス語を独習した。さらに、辞書の編纂や著作の刊行を通して、フランスにおける日本学、日本におけるフランス学をそれぞれ切り拓いた。本稿では、19 世紀半ばにおける、レオン・ド・ロニーと村上英俊のそれぞれが目標とする言語の独習の軌跡を追い功績を見定める。当時のフランスにおける日本語の必要性と、日本におけるフランス語の必要性の違いについても指摘する。さらに、この二人の先駆者が成し遂げた業績の、その後のフランスでの日本語教育、日本でのフランス語教育への影響を見ていきたい。

1.　フランスと日本の交流

13 世紀にマルコ・ポーロ Marco Polo が著したアジアの記録『東方見聞録』*Le Devisement du Monde* において、日本は極東の未知の島国にとどまっている。ポルトガル、スペインの宣教師たちのアジアでの活躍は 16 世紀を待たなくてはならない。ヨーロッパでは 18 世紀後半から東洋に対する関心が高まる。とりわけフランスは 18 世紀後半から 19 世紀にかけての東洋研究の中心であり、中国、インド、アラビア、トルコ研究に優れた学者を排出した。アベル・レミュザ Jean-Pierre Abel-Rémusat やクラプロット Heinrich Julius Klaproth らを中心に 1823 年にパリでアジア学会が創立され、アジア学会誌 *Journal asiatique* が発刊された。また、1795 年に東洋語学校が創立されており、以来、トルコ語、ペルシャ語、アラビア文語、アルメニヤ語、現代ギリシャ語、アラビア口語、ヒンドスタニー語、中国語等の講座が開講される。

ヨーロッパの東洋学者達は中国語の素養を基にして日本語を判読することができたので、次第に日本語・日本研究への関心も高まった。1825 年、ランドレス Charles Landresse によってロドリゲス João Rodriguez の『日本語小文典』が *Éléments de la grammaire japonaise* の標題でポルトガル語からフランス語に編訳刊行された。他方、

医師シーボルト Philipp Franz von Siebold は、6 年の滞日ののち、1828 年、国禁の日本地図等を持ち出そうとした件（シーボルト事件）で国外追放の処分を受けたが、彼の持ち帰った日本文献はヨーロッパの日本語・日本研究を支えた。シーボルトはライデン大学の日本学者ホフマン Johann Hoffmann の協力を得て 594 点の目録を作成し、日本語学習の便宜のために『四体千字文』、『書言字考』などの翻刻を出版した。

日本へ目を転じると、1543 年にポルトガル商船が種子島に漂着し、その 6 年後にはイエズス会のフランシスコ・ザヴィエル Francisco de Xavier が日本で布教を始めた。宣教師たちは、文法書も辞書もない時代に、日本語以外は話さず、実践的にそしてがむしゃらに日本語に慣れていった。この時代の日本と西欧との交流は、専ら宣教師たちのこのような努力に支えられた [1)]。しかし、この時代の日本語教育において、フランス人の果たした役割は皆無である。例外は、1636 年に琉球に潜入したドミニコ会フランス人神父ギョーム・クールテ Guillaume Courtet の翌年の長崎での殉教であろう。宣教師たちの日本への布教は日本各地での殉教事件の歴史とも言える。他方、最初にヨーロッパ大陸の大地を踏んだ日本人は、ザヴィエルに同行し、1551 年にポルトガルやローマを訪れ、当地で没した鹿児島のベルナルドだと言われる。また、1615 年に遣欧使節団の支倉常長一行が旅の途中フランスに足を踏み入れるという機会があったぐらいだ。その後日本の鎖国は 1639 年から 1854 年まで続き、その間オランダと中国とのみ貿易が認められた。

1807 年にロシアの海軍大尉ニコライ・アレクサンドロヴィチ・フヴォストフ Nikorai Alexandrovitch Khvostov がサハリン南部の日本人集落を略奪した末に、通商を強硬に要求する文書を残した。この文書はロシア語文に、満州語訳文、稚拙な日本語訳文、および正式文書の訳文としてのフランス語文がつけられており、出島のオランダ商館長ヘンドリック・ドゥフ Hendrik Doeff がこのフランス語をオランダ語に訳した。1808 年 2 月、幕府は 6 名の通詞（石橋助左衛門、中山作三郎、本木庄左衛門、今村金兵衛、楢林栄左衛門、馬田源十郎）にヘンドリック・ドゥフの指導の下でのフランス語学習を命じた。彼らはピーテル・マリン Pieter Marin の仏・蘭教科書 *Nouvelle Méthode pour apprendre les principes et l'usage des langues françoise et hollandoise* を使って半年にわたりフランス語を学んだが、イギリス船による「フェートン号事件」によって、イギリスの事情を知る必要性から英語学習が命じられ、このフランス語学習は中止させられた。彼らのフランス語学習方法についてはほとんど何も伝えられていない。本木庄左衛門はこの後にフランス語学習を再開し、フ

ランス語辞書『払郎察辞範』の編纂を志したが、これは刊行されず、原本は草稿のまま長崎市立博物館に保存されている。辞書が刊行されなかった以上、その成果が後進の人々に継承されることはなく、長崎通詞たちの仕事が後のフランス語学習の発展に影響を与えたわけではない。しかし、村上英俊以前の先人たちの準備、発酵の時代の業績と認められる[2)]。

2. レオン・ド・ロニーと村上英俊、それぞれが日本語、フランス語を学ぶ経緯

レオン・ド・ロニーは1837年に北フランスのリール市近郊のロース Loos に生まれた。考古学に興味を持っていた父親の蔵書は見事なもので、ロニーは幼少期に父親から古仏語の手ほどきを受けたり、ラテン語で話すよう躾けられたりした[3)]。自然科学、考古学、民族学、文献学といった幅広い分野で見せたロニーの後の活躍ぶりは、その早期教育の賜物だったのだろう。そして、一家は1843年にパリに移り住む。ロニーは製本、植字の技術を習得する一方、植物学、物理や代数学、幾何学を学ぶ。そして、代数学と幾何学の教師から中国の話を聞いたことで、東洋趣味が芽生えることになり、1852年に15歳で東洋語学校に入学した。ここでタイ語、アラビア語、アルメニア語、ヒンドスタニー語、マライ語、ジャワ語、チベット語などを受講する[4)]。上述したアベル・レミュザの弟子であるスタニスラス・ジュリアン Stanislas Julien、そしてその弟子のアントワーヌ・バザン Antoine Bazin に付いて熱心に中国語を学ぶなか、当時難解でほとんど研究されることがなかった日本語を学ぶようスタニスラス・ジュリアンに促される。

他方、村上英俊は、1811年に下野国（現在の栃木県）佐久山に生まれた。父親の村上松園は医術を修めたこともあり、英俊にも医術を修めさせようと江戸に移住した。英俊は日夜勉学に励み、数え年16歳にして漢詩文にもよく通じている。18歳で当時の鎖国という状況で西洋の学問を修めるために必須であった蘭学を始め、数え年31歳まで続ける。その後、1841年、松代藩真田幸良の側室となっていた妹チエが世継ぎ幸教を生んでいる縁で信州松代に移り住む。

当時の8代松代藩主幸貫は学問武芸を奨励しており、佐久間象山は激動する海外情勢についての顧問であった。佐久間象山と同年齢であった村上英俊は彼と親交を深めた。佐久間象山は、非科学的なものと思われた翻訳を通して西洋砲術を学んだ経験から、真の学問は翻訳を通してではなく原書で学ばなくてはならないと考えた。日本の近海では欧米諸国の進出が盛んで、いつまでも鎖国を続けられない状況があり、佐久間象山は外敵の侵入に対抗するために火薬の製造に大きな関心を寄せた。

オランダ書に詳しい村上英俊に相談すると、ヨーロッパで評判のベルセリウス Jöns Jacob Berzelius の『化学提要』*Lareboki Kemien* の名を挙げた。藩に掛け合い購入の手続きをとったが、1 年半待って届いた『化学提要』はオランダ語訳ではなくフランス語訳であった。再注文のための時間もなく、また大きな出費ともなうため、佐久間象山は村上英俊にフランス語を学ぶことを奨めた。1848 年のことである [5)]。

ロニーが 1837 年生まれ、村上英俊が 1811 年生まれで、生年においては 26 年の差がある。しかし、ロニーが早熟であったこと、村上英俊にとってフランス語学習が 30 半ばを過ぎての予定外の出来事であったことから、それぞれ日本語とフランス語の学習を始めたのは、ロニーが 1853 年頃、村上英俊が 1848 年と、ほぼ同時代となる。しかし、仏日二人の独学者が誰も手をつけていない新しい言語に挑んだ 19 世紀半ばのフランス、日本を取り巻く状況は大きく異なる。東洋趣味、および東洋学者の研究対象でしかない日本語と、鎖国の状態からいずれ開国が予測される日本での、技術を取り入れるための西洋の主要な言語の一つであったフランス語とでは、その必要性を異にする。翻って、この二人の独学者には共通点が見出せる。父親が考古学者であり、息子の早期教育に熱心であったロニーの家庭と、父親が医術を修め、息子の勉学のために江戸へ移住した村上家の家庭の環境である。また、二人がほとんど資料がなく人々が手をつけていない言語を学ぶことを躊躇しなかったことは、分野を跨いで多方面へ示していた二人の才能と無関係ではないだろう。

3. それぞれの独習方法

先に述べたように、それぞれの事情から日本語、フランス語に出会ったレオン・ド・ロニーと村上英俊の二人であったが、辞書も学習書もない言語に対して、開拓者としての手探りの独習が始まる。

ロニーは、上述のランドレスによって編訳刊行されたロドリゲスの『日本語小文典』や、シーボルトが翻刻させた『四体千字文』、『書言字考』を用いて独習した。1856 年に刊行した『日本語考』*Introduction à l'étude de la langue japonaise* の序文で、ロドリゲスの『日本語小文典』は役に立たなかったこと、そして『書言字考』を通してどのように日本語を学んだかを次のように述べている。

> Malheureusement cet ouvrage [= une traduction française de la Grammaire japonaise du P. Rodriguez] n'a pas répondu aux grandes intentions des savants qui composaient alors cette Société,

et cette publication ne put amener aucun bon résultat pour la science. [...] Moi-même, après avoir, en grande partie, perdu mon temps à apprendre la Grammaire japonaise mentionnée plus haut, je résolus d'étudier le Syo-gen-ziko (édition de M. von Siebold), et de rétablir dans un ordre alphabétique simple et facile, au moyen de cartes, les mots japonais qui, dans l'ouvrage précité, sont disposés sous treize rubriques, de telle façon qu'ils ne peuvent être trouvés sans des pertes de temps déplorables. Je relevai également les mots que je trouvai çà et là dans les ouvrages des voyageurs, et surtout dans les vocabulaires publiés par les anciens missionnaires au Japon ; puis, à l'aide du Syo-gen-ziko, il me fut possible d'en vérifier l'exactitude ou d'en corriger les erreurs. Enfin, j'entrepris l'étude des textes japonais que j'avais à ma disposition avec les secours que je m'étais formés et avec ceux que me fournissait la collection chinoise-japonaise de la Bibliothèque impériale. C'est ainsi que, procédant du connu à l'inconnu, je parvins à reconstituer sur de nouvelles bases et pour mon usage, une grammaire japonaise, dont l'Introduction qui suit présente un abrégé[6].

残念ながら、この本（ロドリゲスの『日本語小文典』フランス語訳）は、アジア学会を当時構成していた学者たちの大いなる望みには見合わず、この本の出版は学問になんの良い結果ももたらさなかった。[…]私自身、上述した『日本語小文典』を学ぶのに大半の時間を費やした後、『書言字考』（シーボルト版）を学ぶことに決めた。上述の本の中に 13 部門にわたって散在し、あたら時間を費やしてしか見つけられない単語を、カードを用いて簡単で分かりやすいアルファベット順に並べ直した。同様に、旅行者たちの著作や、とりわけ昔の宣教師たちによって出版された語彙集のあちこちから単語を拾い出し、『書言字考』によってその正しさを確認し、またその誤りを訂正することができた。自分で作成したこれらの資料と帝国図書館の中国・日本関係書籍の助けによって、やっと、当時私が手元に集めていた日本語文献の研究に着手することができた。このようにして既知から未知へと歩みを進め、新しい基礎の上、自分自身が利用するために、日本語文法を再構成するに至った。以下の「考察」はその概要である。

このように、数少ない日本語の書物の単語を一つ一つカードに書き出しながら日本語を独習したことが分かる。1858 年に『いくつかの日本語辞書とそれらが採っている説明法についての考察』*Remarques sur quelques dictionnaires japonais et sur la nature des explications qu'ils renferment* を発行している。

ところで、1862 年の遣欧使節団のヨーロッパ訪問の際、日本使節接待係として福沢諭吉、松木弘安（後の寺嶋宗則）らと親交を結んだエピソードはよく知られている。「仏蘭西の人『ロニ』なる者あり。支那語を學び又よく日本語を言ふ。時に旅館に來り談話時を移す」[7]と福沢諭吉は 1862 年 3 月に記している。オランダやペテルスブルグにまで追いかけ回すロニーの熱心さは呆れるばかりであったが、ロニーの日本語が不十分だったこと、一行の中でフランス語を解すのは立広作一人であったことから、彼らの交流では主に英語が使用されたようである [8]。この遣欧使節団との交流から、ロニーは日本語の文語と口語の違いを知り、口語日本語の学習の必要

性を認識したに違いない。

この翌年の 1863 年に東洋語学校の無料の公開講座で 26 歳のロニーが日本語を教えたのがフランスでの日本語教育の始まりとなる。1868 年に、正式に日本語講座がアラビア語に代わって設置され、ロニーが初代の日本語教授に任命された。この時教授職を争ったのはレオン・パジェス Léon Pagès である。パジェスの方が日本語の運用能力において優っていたと思われるが [9]、すでに東洋語学校で教えていたロニーがこの職を得た。パジェスが 1862 年に刊行した和仏辞書 *Dictionnaire japonais-français* の評価は高い [10]。

ロニーは、日本語コースのプログラムに取り掛かり、教授法を体系的にしようと試みる。彼の教科書は、ローマ字から徐々に日本語の書体に入る方法ではあるが、中国語をはじめとして複数のアジアの言語の知識もふんだんに披露されている [11]。1870 年代よりフランスに留学する日本人は多くなり、来日するフランス人も増えたが、1873 年に開催された国際東洋学会議で議長を務めたのがロニーの学者としての最盛期といえよう [12]。

対して、佐久間象山に奨められて 1848 年にフランス語学習に着手した村上英俊は、5 ヶ月間フランス文法を学んだのち、ベルセリウスの『化学提要』を読もうとしたが全く歯が立たなかった。「嘉永元年五月初テ。佛蘭西文典ヲ取テ。之ヲ閲スルコト。五閲月。聊カ文法ヲ知ル。故ニ更ニ。別爾攝律私ノ著書ヲ取テ。之ヲ閲スルニ。一行ヲモ讀コト能ハス。」[13]そこでフランス語の学習をやり直した。松代藩の蔵書の中にフランソワ・ハルマ François Halma の辞書と推定される蘭仏対訳の辞書 [14]を見つけ、これを毛筆で筆写することからフランス語学習に取り組んだ。オランダ語の意味を確認しながらフランス語を記憶していく孤独な闘いであった。町医者としての仕事と並行して寝食を忘れて取り組みながらベルセリウスの『化学提要』を読み終えるのに 16 ヶ月の時を費やした [15]。

村上英俊は 1851 年に 10 年の松代生活を切り上げ江戸に戻った。苦労して修めたフランス語の知識を広く世の中に伝えようと考え、唯一の公用ヨーロッパ語であるオランダ語、苦心して学んだフランス語、極めて少数の者が学ぶ英語からなる三国語対照辞典（実質は日本語を含む四国語辞書）の編纂に取り掛かる。1854 年に『三語便覧』を刊行した。従来の辞書と同じように事項別である。フランス語の発音に当てられたカタカナは先に学んでいたオランダ語の影響からか不正確である [16]。また刊行年ははっきりしないが、フランス語、英語、ドイツ語からなる『三語便覧』も著した。当時の多国語辞書の構想は日本の国際的環境と密接に結びついている [17]。

1857 年にはフランス語、英語、オランダ語、ラテン語、日本語の五国語対照辞書『五方通語』を刊行している。また同年に最初の仏和辞書『佛蘭西詞林』を幕府に献上したことで、フランス語と日本語とオランダ語からなる日仏修好通商条約の条文翻訳に携わることとなった。1858 年には、藩書調所へ登用された。この頃得意な化学の研究も続けていた。1864 年には『仏蘭西詞林』の増補改訂版である『仏語明要』四巻を刊行した。この辞書は横書き、アルファベット順の配列で、多くの人に使用された。1867 年には、フランス式兵法の書の翻訳『仏蘭西答屈智幾』を刊行した。そして、1868 年、江東区にフランス語塾「達理堂（通称村上塾）」を開いた。

このように、レオン・ド・ロニー、村上英俊は、彼らの手探りの学習において、それぞれ中国語やオランダ語といった既習の複数の言語の知識を総動員したことが分かる。多言語を操ることはこの時代に新たな知の地平を切り拓こうと志す者にとって必須条件であったようだ。先に述べたように彼らの多方面に示された才能も大きな役割を果たしている。宣教師たちの学習方法とは違って、文献を読み解くための書物を通しての独習も彼らの共通点である。さらに、使用されている生きている言語を開拓した者の当然の帰結として、次の世代の学習者のための教育方法を模索するに至ったことも彼らに共通する事柄として挙げられよう。

4. 伝播、普及への貢献と後進の批判

遣欧使節の訪欧以後来仏する日本人も増え、彼らとの接触から、ロニーは文献解読型の学習方法が話し言葉の習得にいかに不適当であるかを痛感したに違いない。しかし、日本文学、養蚕術、中国文学、仏教、アイヌ文化、セム語、マヤ語など多方面に才能を示したロニーだが、好奇心が強すぎて一つの仕事に専念できなかったようである[18]。その一方で、西欧化の道をたどる日本に興味を惹かれなくなり、やがて日本語の教授に対しても熱意を失っていく。そして宗教へと関心が向くが、1886 年のロニーの仏教の講座は物議を醸し宣教運動であるとの非難も受けた。1893 年、ロニーは、コレージュ・ド・フランスの亡くなった中国文化学教授の後任に立候補したが、このポストを得られなかった。 彼の多産で多方面にわたる研究が厳密さに欠け、評価がさほど高くなかったことが一因のようだ[19]。ロニーの業績はほとんどが完成に至らず、テーマを掘り下げていなかった。家庭の事情からか日本を訪れることがなかったことも惜しまれる。若いロニーが資料と格闘して覚えた日本語は、後進にどんどん追い越されていく結果となったが、1883 年に日本政府から勲 4 等旭日小綬章を、1884 年にはレジオン・ドヌール・シュヴァリエを授けられている。そ

して、1907 年の定年まで東洋語学校で日本語を教え、1914 年に死去した。

他方、村上英俊の達理堂には、全国から門人となるべく人材が集まってきた。加太邦憲、濱尾新、栗塚省吾、土屋政朝といった維新後の日本を動かした人物を多数門人の中から輩出している。中江兆民もいたが、彼は遊蕩のため達理堂を破門されている[20)]。しかし、やがて門人の中から、フランス人と話し合えるようなフランス語を学びたいという声が聞こえるようになった。というのも、横須賀製鉄所の建設や、陸軍三兵伝習のために多数のフランス人が来日するようになったためである。このような事情からフランス語学習者を育成するために 1865 年に横浜にフランス語の伝習所が設立され、フランス語を教える私塾も増えた。実際にフランスの地を踏んで帰国したあと開塾する箕作麟祥のような人物が現れ、また、フランス人も教壇に立つようになると、門人たちが達理堂を離れていくようになった。このような状況で、会話力を示す必要性から、村上英俊は 1872 年に『仏英独三国会話』を刊行している。しかし発音の表記がカタカナで記されていることにより、村上英俊の音声を無視した学習法の問題も明らかになっている。1877 年、ついには塾生が集まらなくなり閉塾となった。村上英俊の独学のフランス語が時代の要求に合わなくなったためである。村上英俊もまた、フランスの地を踏む機会のなかったことが惜しまれる。このように窮地に陥った恩師のために昔の門人たちが奔走し、村上英俊は 1882 年に東京学士会院会員に選出され、1885 年にはレジオン・ドヌール・シュヴァリエを授けられている。そして、1890 年にその生涯を閉じた。

レオン・ド・ロニー、村上英俊のそれぞれの晩年においては、時代の流れに取り残される面が見受けられた。両者とも、直接、あるいは著作を通して間接的に多くの後進を育てたが、開拓者とは後進に追い抜かれる運命にあることが実感される。

さいごに

フランスにおける日本語学と、日本におけるフランス語学の始祖である、レオン・ド・ロニー、村上英俊という二人の独学者の軌跡と功績を辿った。言語学者であるレオン・ド・ロニーと、医者であり化学者でもある村上英俊には、それぞれ日本語、フランス語の習得を通して目指す事柄への関心に違いがある。しかし、それぞれ日本にもフランスにも行かず、文献から独習した情熱と才能にはいくつかの共通点が見られた。レオン・ド・ロニーは、既習の中国語の知識を使ってシーボルトが翻刻させた『書言字考』等の日本語文献の中の語彙をカードに取りながら学んでいく。

翻って、村上英俊は自らの蘭学の素養を用いて、蘭仏辞書を筆写しながらフランス語を独習する。二人のこのような独習の方法には複数の言語や教養を駆使するという共通点が見られる。

レオン・ド・ロニーは、日本文学、養蚕術、アイヌ文化、仏教を論じるなど、その活動範囲は広いが、日本の色々な面に興味があったため一つの仕事に専念できなかったようである。他方、村上英俊が編纂した『三語便覧』は、正確ではない発音を含みながらも後進の勉学を助けた。のちの仏和辞書『仏語明要』の刊行は、当時主流であった多国語辞書からフランス語と日本語の二国語の辞書への移行を示すものである。また、村上英俊が開いたフランス語私塾達理堂は多くの優秀な人材を輩出しており、彼の教育者としての優れた側面が見てとれる。晩年、レオン・ド・ロニー、村上英俊のそれぞれの日本語とフランス語は、時代の要求に合わなくなり、後進にも追い抜かれ、方法を批判される憂き目に遭う。

しかしながら、東洋の異文明に魅せられたレオン・ド・ロニーの熱意が、フランスの日本語教育史上ユニークな足跡を記し、その後のフランスでの日本語教育の流れが作られたことは間違いない。フランスの日本語学習者は最初の日本語講座の開講から約 100 年の間、フランス全体で 50 人を超えないながら、常に一定数の学習者がいた。それが日本の経済発展とともに 1960 年代のはじめから 1980 年代にかけて学習者は 1000 人を超え大きく増加する [21)]。翻って、村上英俊は火薬づくりの技術を得るために原書にあたる必要があっただけだったが、日本ではやがて外交文書としてのフランス語、および法律、兵法を学ぶためのフランス語の必要性がより切実になっていくという事情の変化があった。多くの人に使われた辞書の発刊や教育者としての功績から、日本のフランス語教育において村上英俊の果たした役割は大きい。

注

1) 杉本つとむ『西洋人の日本語発見』、講談社、2008、pp. 15-104. 及び、熊沢精次「十六世紀から幕末開国期までの日本語研究と日本語教育」、木村宗男編集『日本語と日本語研究 15 日本語教育の歴史』、明治書院、1991、pp. 1-37.

2) 中村義男「幕末長崎に於けるフランス語研究」、広島大学文学部紀要第 9 号、1956. 及び、高橋邦太郎『日仏の交流―友好 380 年―』、三修社、1982、pp. 143-161.

3) Luc CHAILLEU, « Léon de Rosny (1817-1914). Repères chronologiques » in *Comment Léon de Rosny, homme du nord découvrit l'empire du soleil levant*, Bibliothèque municipale de Lille, 1986-1987. 及び、Joseph DUBOIS, « De la région Nord / Pas-de-Calais au Japon. Quatre générations d'hommes de lettres du nord de la France » in *Revue du Nord*, 1991.

4) Luc CHAILLEU, *op. cit.*

5) 富田仁『フランス語事始―村上英俊とその時代』、NHK ブックス、1983、pp. 48-59.

6) Léon de ROSNY, *Introduction à l'étude de la langue japonaise*, 1856, Préface.

7) 福沢諭吉「西航記」、『福沢諭吉全集第 19 巻』、岩波書店、1962.

8) 松原秀一「レオン・ド・ロニ略伝」、近代日本研究 Vol. 3、1986、pp. 17-35.

9) 杉本つとむ前掲書、pp. 285-288.

10) Bernard FRANK, « Les études japonaises » in Cinquante ans d'orientalisme en France (1922-1972), *Journal asiatique*, 1973.

11) 熊沢精次「フランスの日本語教育史―レオン・ド・ロニを中心に」、日本語教育 60 号、1986.

12) 松原秀一前掲論文、p. 50.

13) 村上英俊『仏語明要』、達理堂、1864 年、凡例。

14) このハルマの辞書は、ヘンドリック・ドゥフが長崎通詞達と協力して蘭和対訳辞書として編纂し直しており、「ヅーフハルマ」Doeff-Halma、「長崎ハルマ」と呼ばれていた。

15) 『化学提要』は 3,000 ページ以上あるが、火薬に関する記述もないので、村上英俊が読破したかどうか疑わしいという見解もある。富田仁前掲書、p. 63.

16) monde-モンデ、etoile-エトイレ（アクサンなし）、soleil-ソレール、vent-ヘントなど。参考図版『三語便覧』参照。

17) 富田仁前掲書、pp. 65-87.

18) クリス・ベルアドは、ロニーの演劇作品を論じている。クリス・ベルアド「レオン・ド・ロニー『青竜寺』（1872）の構造と物語 ： フランス演劇初の「日本」をめぐって」、*Gallia 51*、2012.

19) Luc CHAILLEU, *op. cit.*

20) 富田仁『フランスに魅せられた人びと ： 中江兆民とその時代』、カルチャー出版社、1976.

21) ジャン・ジャック・オリガス「フランスにおける日本語教育の現状と課題」、国際交流基金日本語国際センター編『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉1』、1994.

ici à la grammaire japonaise proprement dite, nous avons cru, pour la clarté du travail, devoir la diviser en neuf sections analogues à celles de nos grammaires européennes. Nous essayerons, dans chacune d'elles, de faire comprendre brièvement et autant que nous le pourrons la valeur réelle que possède chaque mot, en conservant à la langue tout son génie et toute son originalité.

§ I. NOM OU SUBSTANTIF.

1. Les noms japonais peuvent se diviser en deux classes principales, comprenant les noms propres et les noms communs.

2. Parmi les noms propres, on distingue les noms propres d'hommes, comme オトバ *otoba*, クワリン *kwō-rin*; les noms de pays, de villes, de fleuves, de montagnes, etc., comme ニッポン *nippon* (日ニ本ポン) « le Japon », ヲワリ *owari* (尾ヲ張リ) « la province d'Owari », ナガザキ *nagazaki* (長ナガ崎ザキ) « la ville de Nangasaki » ; les noms géographiques, etc.

3. Les noms propres japonais sont souvent d'origine chinoise, seulement ils sont prononcés dans le dialecte japonais. Ex.: シンム *sin-mŏ* (ch. 神武 *chen-wŏ*), nom du premier *daïri* ou empereur du Japon.

4. Les noms propres sinico-japonais, aussi bien que ceux qui ont une origine purement japonaise, sont, dans les livres originaux, généralement transcrits en caractères chinois. Dans les ouvrages écrits en *fira-kana*, ces derniers sont tracés en écriture cursive ou *ts'ào*.

5. Les substantifs communs sont, ou purement japonais, comme ツチ *tsŏtsi* (土地ツチ) « la terre », トリ *tori* (鳥トリ) « l'oiseau » ; ou sinico-japonais (d'origine chinoise), comme 天テン *ten* (ch. *t'ien*) « le ciel », 金キン *kin* (ch. *kin*) « l'or ».

6. Les noms ou substantifs japonais ne possèdent point de genres réels ; seulement on peut leur ajouter quelquefois des particules qui servent à déterminer à quel sexe ils appartiennent. Pour les mammifères, par exemple, la préfixe ヲ *o* dé-

---

出テ於ニ葉ハ], ou *te, ni, vo, fa* [テニヲハ *te-ni-wo-fa* 出テ爾ニ乎ヲ波ハ], ou *sutegana* [ステガナ *sŏte-ga-na* 棄ステ假ガ名ナ], ou *vokiji* [ヲキジ *wokizi* 直ヲキ字ジ], de baixo da qual comprendem os artigos dos cazos dos nomes, e todo o genero de particulas, assim dos tempos, como todas as de mais de qualquer sorte que sejão, que não tem letra propria, mas são da lingoa japoa natural. » *Arte breve da lingoa japoa; ms.* p. 52 r° et v°.

Léon de ROSNY, *Introduction à l'étude de la langue japonaise*, 1856.

世界	monde.	world	wereld.
天	ciel.	heaven.	hemel.
恒星天	ciel etoile.	Starheaven.	Sterrehemel.
大空	firmament	firmament.	uitspandel.
星辰	astres.	Star.	gesternte.
星	etoile.	Star.	Ster.
彗星	comete.	comet.	Staart Star
極星	etoile polaire.	pole Star.	poolstar.
明星	etoile du soir.	evening Star.	avondStar.
常恒星	etoile fixe.	fast Star.	vaste Star.

村上英俊『三語便覧』、1854.

五方通語卷之一

茂亭村上義茂著述

伊之部

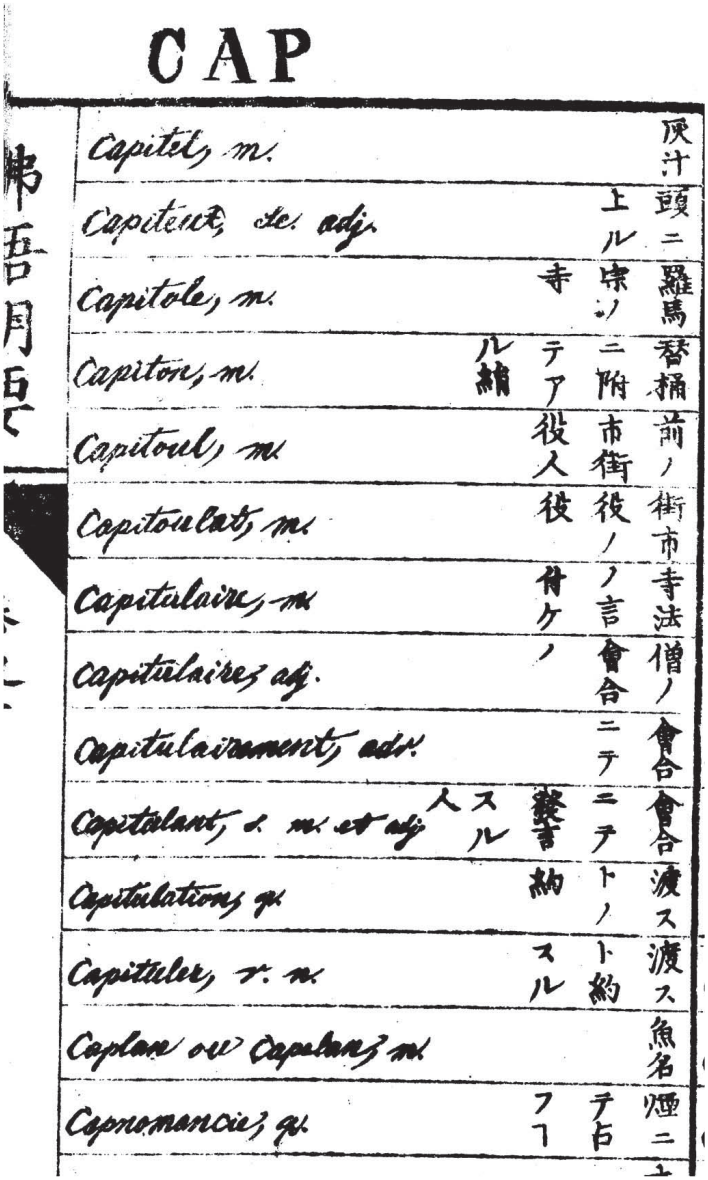
天文

納日（イリヒ） 落日 Otchen dii Schuif 佛 Kin-sac 英 Soleil

Onkhoiono 蘭 Ariosol Sfin 羅 異域志 沙弼國係日西没之地至晩日入聲若雷霆國王每於城上聚千人吹角鳴鐘擊鼓混雜日聲不然則小児驚死（イダツナ）雷 雷公

Tonnerre 佛 Thunder 英 Donder 蘭 Tonitrui 羅 易繫辭 動萬

村上英俊『五方通語』、1857.



CAP

Capitet, m.		灰汁
Capitent, se. adj.	上ル	頭ニ
Capitole, m.	寺宗ノ	羅馬
Capiton, m.	ニ附テア ル綿	替桶
Capitoul, m.	役人役	前ノ
Capitoulat, m.	役ノ	街市
Capitulaire, m.	付ケノ	寺法
Capitulaire, adj.	會合ニテ	僧ノ
Capitulairement, adv.		會合
Capitulant, s. m. et adj.	人スル	會合ニテ
Capitulation, qs.	約	渡ス
Capituler, v. n.	スル	渡ス
Caplan ou Capelan, m.		魚名
Capnomancie, qs.	フ	煙ニテ占

村上英俊『仏語明要』、1864.

Deux autodidactes, Léon de ROSNY et MURAKAMI Hidetoshi
— leur influence sur l'enseignement du japonais et celui du français —

Yasue IKAZAKI

Au milieu du XIXe siècle, Léon de ROSNY (1837-1914) s'attaque à la langue japonaise, alors réputée hermétique, tandis que MURAKAMI Hidetoshi (1811-1890) lit le *Traité de Chimie* de Berzelius en français. Ils apprennent leurs langues cibles tout seuls à l'aide des quelques documents qu'ils se sont procurés. D'une part, en étudiant le *Syo-gen-ziko*, document ramené du Japon par P. F. von Siebold, Léon de ROSNY relève les mots japonais dans l'ordre alphabétique au moyen de cartes. De son côté, MURAKAMI Hidetoshi recopie un dictionnaire néerlandais-français, supposé être celui de François Halma.

Ces autodidactes ont quelques points communs : leur milieu familial qui leur a donné une bonne éducation précoce ; leur maîtrise de plusieurs langues, notamment le chinois chez Léon de ROSNY et le néerlandais chez MURAKAMI Hidetoshi, compétence requise et indispensable au défrichement d'une langue encore peu étudiée ; enfin leurs talents multiples et leur appétit éclectique qui les ont probablement poussés à l'autodidaxie.

Léon de ROSNY devient professeur à l'École des Langues Orientales en 1868. Il y organise les cours de japonais et publie des articles tels que l'*Introduction à l'étude de la langue japonaise.* Cependant, ce savant plus doté d'imagination que de rigueur s'éveille au bouddhisme et perd sa passion pour l'enseignement du japonais dans ses dernières années. Quant à MURAKAMI Hidetoshi, il publie d'abord le *Sango Benran*, un dictionnaire français-anglais-néerlandais-japonais, ensuite le *Futsugo Meiyō*, un dictionnaire alphabétique français-japonais. En 1868, il ouvre un cours privé de français Tatsurido. Mais n'ayant jamais eu de contact réel avec les Français, la conversation n'est pas son point fort. Cette école ferme ses portes en 1877. Alors qu'ils ont, grâce à leur démarche, promu l'enseignement du japonais et celui du français, et formé leurs successeurs, ces autodidactes sont critiqués et dépassés par leurs cadets vers la fin de leur vie : c'est le destin inévitable des pionniers. En tout cas, leurs travaux ont ouvert la voie aux études japonaises et françaises.